

Asia Indicators

発表日: 2022年11月11日(金)

韓国の雇用環境は若年層や働き盛り世代にとって厳しい状況が続く(Asia Weekly(11/7~11/11))

～台湾では外需の厳しさが増す一方、国内ではインフレ圧力が一段と高まる展開が続く～

第一生命経済研究所 経済調査部

主席エコノミスト 西濱 徹(Tel: 03-5221-4522/050-5474-7495)

○経済指標の振り返り

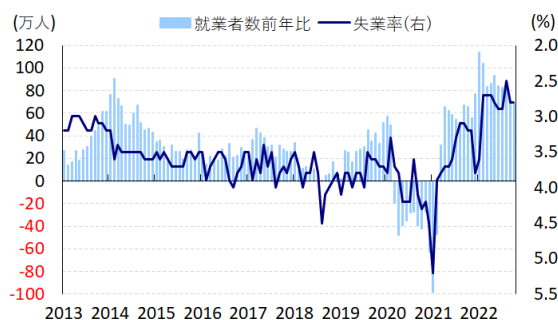
発表日	指標、イベントなど	結果	コンセンサス	前回
11/7(月)	(インドネシア)7-9月実質 GDP(前年比)	+5.72%	+5.89%	+5.44%
	(中国)10月輸出(前年比)	▲0.3%	+4.3%	+5.7%
	10月輸入(前年比)	▲0.7%	+0.1%	+0.3%
11/8(火)	(マレーシア)9月鉱工業生産(前年比)	+10.8%	+10.3%	+13.5%
	(台湾)10月消費者物価(前年比)	+2.7%	+2.7%	+2.8%
	10月輸出(前年比)	▲0.5%	▲6.0%	▲5.3%
	10月輸入(前年比)	+8.2%	▲3.5%	▲2.4%
11/9(水)	(韓国)10月失業率(季調済)	2.8%	--	2.8%
	(中国)10月消費者物価(前年比)	+2.1%	+2.4%	+2.8%
	10月生産者物価(前年比)	▲1.3%	▲1.5%	+0.9%
11/10(木)	(フィリピン)7-9月実質 GDP(前年比)	+7.6%	+6.3%	+7.5%
11/11(金)	(マレーシア)7-9月実質 GDP(前年比)	+14.2%	+11.7%	+8.9%

(注) コンセンサスは Bloomberg 及び THOMSON REUTERS 調査。灰色で囲んでいる指標は本レポートで解説を行っています。

[韓国]～失業率は2ヶ月連続で横這いとなるも、若年層や働き盛り世代を中心に労働市場からの退出の動き～

9日に発表された10月の失業率(季調済)は2.8%となり、前月(2.8%)から2ヶ月連続の横這いで推移している。失業者数は前月比▲0.5万人と前月(同+9.6万人)から2ヶ月ぶりの減少に転じており、年代別では10代及び20代の若年層や30代を中心に減少している一方、40代や50代、60代以上の高齢層を中心に拡大するなど対照的な動きがみられる。一方の雇用者数は前月比▲0.5万人と前月(同▲2.2万人)から2ヶ月連続で減少しており、年代別では60代以上で唯一拡大しているものの、若年層から働き盛り世代にかけて減少する動きがみられるなど、失業者数同様に対照的な動きをみせている。雇用形態別でも、正規労働のみならず非正規労働もともに調整の動きを強めており、雇用は量及び質の両面で悪化の度合いを強めている。さらに、労働力人口は前月比▲0.1万人と前月(同+0.7万人)から2ヶ月ぶりの減少に転じており、年代別では60代以上の高齢層で唯一拡大している一方、若年層や働き盛り世代では軒並み減少しており、雇用を取り巻く環境が急速に厳しさを増している様子が見え始める。事実、労働参加率は64.0%と前月(64.0%)から横這いで推移しているものの、60代以上の高齢層で上昇する一方で若年層や働き盛り世代で軒並み下落しており、若年層や働き盛り世代を中心に労働市場から退出の動きを強めている様子が見え始める。

図1 KR 雇用環境の推移



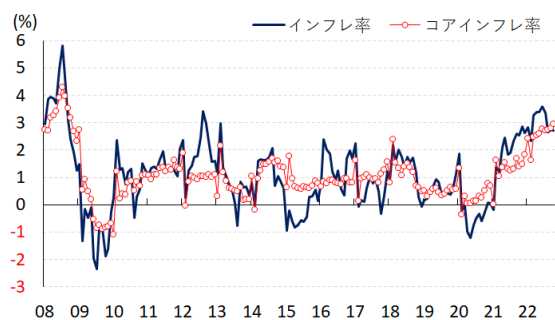
(出所)CEIC より第一生命経済研究所作成

[台湾]～インフレ率はわずかに鈍化も、景気の堅調さを反映してコアインフレ率は14年ぶりの水準に加速～

8日に発表された10月の消費者物価は前年同月比+2.7%となり、前月(同+2.8%)からわずかに伸びが鈍化している。ただし、前月比は+0.27%と前月(同+0.24%)からわずかに上昇ペースが加速しているものの、食料品価格の上昇の動きに一服感が出ているほか、原油をはじめとする国際エネルギー価格の上昇の動きが一巡していることを受けてエネルギー価格も下落に転じるなど、生活必需品を巡るインフレ圧力は後退している。なお、生鮮食料品とエネルギーを除いたコアインフレ率は前年同月比+2.96%と前月(同+2.80%)から加速しており、2008年10月以来となる丸14年ぶりの高い伸びとなっている。前月比も+0.59%と前月(同+0.25%)から上昇ペースが加速しており、これまでのエネルギー価格の上振れを受けて輸送コストの上昇に加え、金融市場における通貨TWドル安による輸入物価の押し上げも重なり幅広く財価格が上昇傾向を強めているほか、感染一服による経済活動の正常化の動きを反映してサービス物価も上昇が続くなど、全般的にインフレ圧力が強まっている。

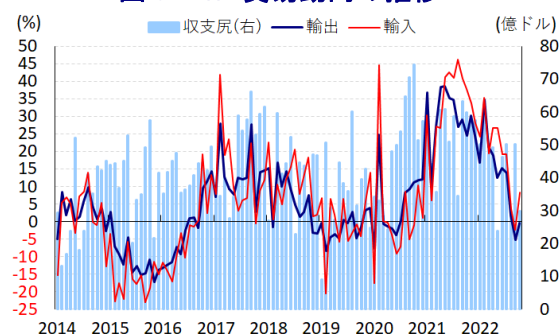
また、同日に発表された10月の輸出額は前年同月比▲0.5%と2ヶ月連続で前年を下回る伸びとなっているものの、前月(同▲5.3%)からマイナス幅は縮小している。前月比も+2.4%と前月(同▲3.3%)から4ヶ月ぶりの拡大に転じるなど減少傾向が続いた流れに一服感が出ているものの、中期的な基調は減少傾向で推移するなど流れが大きく変わる状況にはない。財別では、IT関連の電気機械製品などの輸出に堅調さがうかがえるものの、主力の輸出財である半導体など電子部品関連の輸出は弱含んでいる上、金属関連や化学関連などの素材及び部材の輸出も力強さを欠く動きが続いている。世界経済の減速懸念の高まりに加え、米中関係の悪化の余波が及んでいることも輸出の足かせとなっている。一方の輸入額は前年同月比+8.2%となり、前月(同▲2.4%)から2ヶ月ぶりに前年を上回る伸びに転じている。前月比も+6.4%と前月(同▲8.8%)から5ヶ月ぶりの拡大に転じるなど減少傾向が続いた流れに一服感が出ているものの、中期的な基調は減少傾向で推移するなど輸出同様に流れが大きく変わる状況とはなっていない。電子部品関連の輸入に底堅い動きがみられるものの、商品市況の底入れの動きに一服感が出ていることに加え、輸出を巡る不透明感が高まっていることを反映して素材及び部材関連の輸入は力強さを欠く動きが続いている。結果、貿易収支は+29.85億ドルと前月(+50.21億ドル)から黒字幅が縮小している。

図2 TW インフレ率の推移



(出所)CEIC より第一生命経済研究所作成

図3 TW 貿易動向の推移

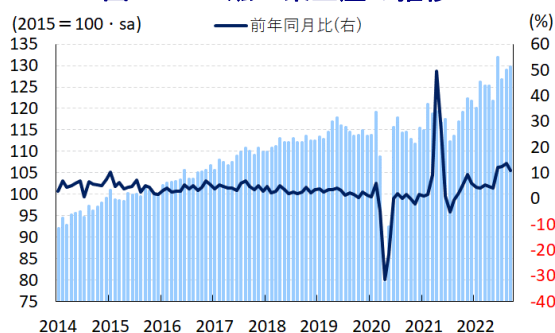


(出所)CEIC より第一生命経済研究所作成

[マレーシア]～鉱業部門のほか、主力の輸出財である電子部品関連の堅調さが生産活動を支える展開が続く～

8日に発表された9月の鉱工業生産は前年同月比+10.8%となり、前月（同+13.5%）から伸びが鈍化している。ただし、前月比は+0.65%と前月（同+1.65%）からペースは鈍化するも2ヶ月連続となる拡大で推移しており、中期的な基調も拡大傾向を維持するなど底入れの動きが続いている。分野別では、製造業やエネルギーなど公益関連の生産が弱含む動きをみせる一方、鉱業部門における生産拡大の動きが全体を押し上げている。なお、鉱業部門においては市況の底入れの動きを反映して主力の天然ガス及び原油関連を中心に堅調な動きがみられる一方、製造業においては主力の輸出財である半導体をはじめとする電子部品関連の生産に底堅い動きがみられるものの、鉄鋼をはじめとする金属関連のほか、化学製品関連の生産が弱含む動きをみせていることが生産活動の足かせとなっており、分野ごとに跛行色が鮮明になっている様子がうかがえる。

図4 MY 鉱工業生産の推移



(出所)CEIC より第一生命経済研究所作成

以上

本資料は情報提供を目的として作成されたものであり、投資勧誘を目的としたものではありません。作成時点で、第一生命経済研究所経済調査部が信ずるに足ると判断した情報に基づき作成していますが、その正確性、完全性に対する責任は負いません。見直しは予告なく変更されることがあります。また、記載された内容は、第一生命保険ないしはその関連会社の投資方針と常に整合的であるとは限りません。